

トンネル被覆による夏秋ナス安定栽培技術

1. 試験のねらい

県北地域は冷涼な気候のため夏秋ナスの収穫期は遅く始まり、早くに終了するため、収穫期間が短い。そこで収穫期間の拡大、特に前進化、早期収量の増収を目的とした作型及び管理技術を検討し、多収技術を確立する。

2. 試験方法

平成13年度に、黒磯分場水田転作畑（表層腐植質黒ボク土）において実施した。供試品種は、穂木を式部、台木をトルバム・ビガーとし、栽植本数は4本仕立てで200cm×70cm、2本仕立てで200cm×35cmとした。施肥の窒素成分はa当たり4.0kgで全量元肥とした。

播種は2月15日、定植は4月26日におこなった。トンネル被覆栽培でのトンネル支柱は小型(270cm)、大型(360cm)、主枝本数は2本、4本で処理した。被覆期間はトンネル上部にナスの枝がふれるまでとし、被覆中はトンネル内の温度を30℃となるよう管理した。対照は同年5月31日に定植した露地栽培のV字4本仕立てとした。

3. 試験結果及び考察

トンネル栽培における被覆期間は、小型トンネルで定植直後から5月25日までの30日間、大型トンネルで6月8日までの44日間となり、トンネルの大小によるトンネル内の温度に差は認められなかった（データ省略）。草丈は、V字2および4本仕立て大型トンネル区で高かった（図-1）。生育初期における株当りの開花数は、大型トンネル区が小型トンネル区より約1花多かった（表-1）。6、7月の可販果収量は、仕立て法にかかわらず大型トンネル区で多収となった（表-2）。可販果収量合計では、V字2本仕立て大型トンネル区が最も多く、露地栽培の対照区と比較すると54.4%の増収となった。

4. 成果の要約

トンネル被覆による栽培においては、主枝2本の仕立て法で栽培することにより6～7月の収量を高めることができる。

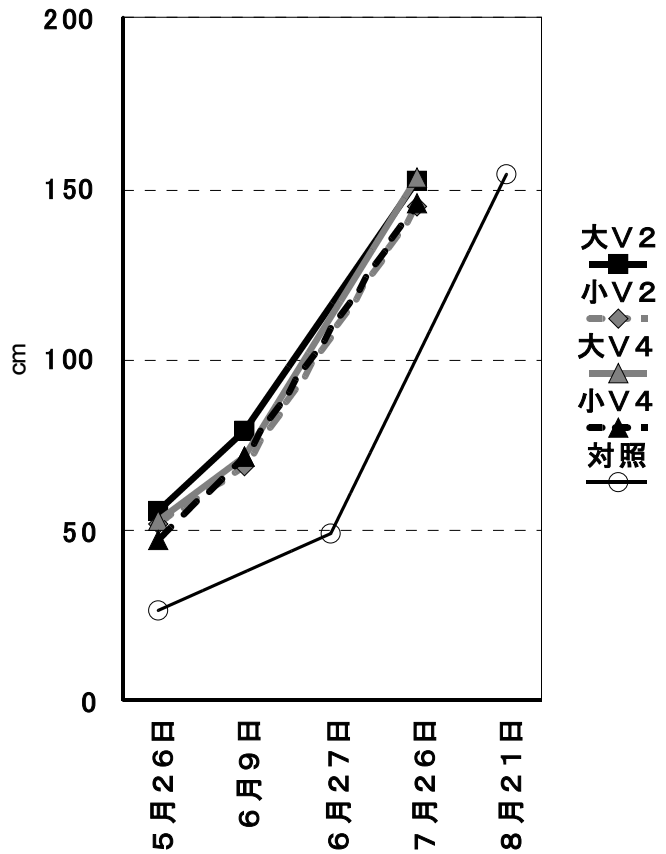
また、大型トンネルによる被覆は、小型トンネルより半月程度の被覆期間延長が可能であり、初期の生育促進による早期収量確保に有効である。V字2本仕立てが早期収量で多収となること、大型トンネルが初期生育、早期収量に繋がることから、この2つの組み合わせが夏秋ナスの早期収量確保に最も有効である。

（担当者 黒磯分場 大金美佐江）

表一 1 トンネル栽培 6月9日
までの開花数

区	花数 (個/株)
V2大	8.2
V2小	7.1
V4大	8.5
V4小	7.3

V2大：V字2本仕立て大トンネル
 V2小：V字2本仕立て小トンネル
 V4大：V字4本仕立て大トンネル
 V4小：V字4本仕立て小トンネル
 対照：V字4本仕立て



図一 1 草丈（第1主枝）の推移

表一 2 10 a 当たりの可販果収量及び総収量（平成13年）

区名	可販果 kg							可販果数 個	総果		可販果率 %	A品率 ¹⁾ %
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計		収量 kg	果数 個		
V2大	42	455	2,412	2,397	1,728	568	7,602	101,617	9,550	108,821	79.6	24.1
V2小	39	221	2,036	2,056	1,645	537	6,523	74,479	8,759	100,967	74.5	20.8
V4大	14	239	2,225	2,279	1,621	513	6,891	78,704	8,765	99,288	78.6	23.5
V4小	10	142	2,065	2,244	1,757	512	6,731	77,675	8,286	97,175	81.2	25.5
対照	0	0	1,123	1,836	1,477	489	4,924	59,215	6,118	74,198	80.5	23.4

注¹⁾ A品率：総収量に対するA品の割合